

《海外研究室事情 (30)》

School of Physics & Astronomy University of Nottingham

ノッティンガム大学物理・天文学科

<http://www.nottingham.ac.uk/astronomy/>

「Nottingham って、どこにあるのですか？」

この質問が一番多い。ロンドンからもマンチェスターからも、悪名高きイギリスの汽車で2時間半ちょっとのところ、イギリスの真中に位置している。天文学グループが出来てまだ十年もたっていない。Nottingham 大学を知らない人が多いのも当然である。しかし、スタッフの名前を聞くと、びんと来る方が多い。Peter Coles と Michael Merrifield が、それぞれ理論天文学と観測天文学のポス。そして銀河進化を光赤外観測的に研究している Alfonso Aragon-Salamanca, 2dF サーベイの PI の一人 Steve Maddox, Virgo Consortium など大型シミュレーションを手がける Frazer Pearce, 早期型銀河の星の種族を観測的に調べている Reynier Peletier と若手大物が名前を連ねている。ポスドクは私を含めて4人。イギリスの大学としては少ないほうではないだろうか。ポスドクのうち二人は、Peter Coles と共に理論的に宇宙論を研究している。残りの一人は2dFのデータ解析が仕事である。といっても、ずっと2dFデータに拘束されているわけではなく、自分の好きな研究もしている。院生が現在11人。したがって、全体で21人の小回りがさく、お手ごろサイズのグループである。

さて、Nottingham のポスドクや院生がどのような研究生生活を送っているか？ ポスドクの場合、朝9時から10時の間くらいに研究室に現れて、午後5時から7時くらいに帰る。博士課程1年から2年生は、10時から11時に現れて、5時から6

時には帰宅。日本の院生やポスドクとはちょっと生活時間帯が異なる。また、イギリスの大学でなんといっても欠かせないのは、毎日朝11時と午後4時のTea Timeである。Tea Timeの時刻は、イギリスの大学、どこでも同じらしい。お茶の時間になると、全員がTea Roomに集まり、巨大なマグカップになみなみとミルクティーを入れて、それをちびりちびりと飲みながら、人によってはチョコレートバーとか小さな袋のポテトチップスなどを食べつつ、30分ほどしゃべるわけである。さらにお昼も1時間以上かけてとるので、日本から来ると、時間の流れがゆったりとしているという印象を受ける。にもかかわらず、研究成果がきちんとでているのは効率が非常によいということだろうか。

学期期間中、週二回セミナーが開かれる。水曜日の夕方のコロキウム、木曜日のお昼過ぎのランチタイムトークである。コロキウムでは他の大学や研究機関の研究者が招かれる場合がほとんどだ。そのためコロキウムの後は、みんなでパブに行くか！ということになる。大学の中にあるスタッフ用パブに行くのがお決まりである。パブでもまた、大ジョッキにビールをなみなみと入れて、それをちびりちびりと飲みながら、ポテトチップスをつまみに、研究のこと・Astro-politicsのことなどしゃべるわけである。(ビールは普通スタッフのおごり。)このコロキウムは、新しい共同研究開始のきっかけとなることがよくある。トークの内容に興味をもった人が、コロキウム終了後にスピーカーのもとに集まり、アイデアを出し合って、議論



が盛り上がりれば研究開始である。一方の、ランチタイムトークは、内輪のセミナーで、院生からスタッフまで全員が半年に一度は発表する。銀河の力学的観点から研究している人、宇宙論を観測的に研究している人、純理論的な宇宙論屋さん、銀河の星の種族を研究している人、研究分野が多様なのでランチタイムトークを聞いているだけで、様々な分野の研究状況がわかり、また私にとっての未知の研究分野に触れることができ興味深い。学期終了間際には（写真で示すように）、みんなが集まってパーティーである。院生・ポストク・スタッフに加えて、それぞれのパートナーもOK。研究分野に関係無く、こういったことができるのは比較的小さなグループだからだろう。

ポストクは通常チュートリアルと呼ばれる学部生のケアを頼まれる。週二回、各一時間程度のミーティングで、十人程度の学部生グループと、授業が理解できているか、大学生活に問題がないか、などの相談にのったり、また宿題についての質問に答えたりしている。その他の時間が研究にあてられる。大きな研究チームになると、毎週一回研究打合せを行うそうだが、Nottinghamの天文学グループではそういったミーティングはない。学生やポストクがスタッフにコンタクトをとると、スタッフが院生+ポストクの部屋に来て議論が始まる。都合のよい時間を決めてスタッフの部屋で議論する場合もある。研究室で誰かが議論していても気

にならないのは、一人あたりの研究スペースが広いことと、イギリスの院生やポストクは日本の院生/ポストクほど物持ちではないために、空間的にゆったりしているためだろうか。また、打合せがスタッフと院生またはポストクの一対一で行われる場合がほとんどで、それほど騒がしくならないためかもしれない。先日、スタッフ二人とポストク二人で議論が盛り上がったことがあったが、まわりの人は少々うるさく感じたかもしれない。逆の例として、2dF サーベイのような大型プロジェクトの場合がある。ほとんどの打合せはEメール経由で行われる。例えば、2dFのデータをつかって研究をしたいという人が現れた場合、2dFメンバー全員に「このような研究をしたいというひとがいるが、いいか?」というメールが流れる。ここで誰からも返事がなかったら了解ということなので、めでたく研究を開始できる。もちろん、論文にするときには、2dFのメンバー全員の名前が入る。

前にも述べたが、Nottingham大学の天文学グループは創世記にある。スタッフの研究テーマは大雑把に二つ、理論的・観測的宇宙論、若しくは、光赤外線観測による銀河進化の研究である。スタッフの間での共同研究も始まり今後の飛躍が期待できるNottingham大学の天文学グループ。興味を持たれた方、より詳しい情報は、<http://www.nottingham.ac.uk/astronomy/>までどうぞ。

生田ちさと（ノッティンガム大学物理天文学科）